転移性肺癌で死亡した78歳男性の解剖とその所見

2014年度夏期解剖実習報告

群馬花子 m10201123、前橋太郎 m10201124、昭和一郎＊ m10201127

（＊代表者）

我々は、解剖学の知識を補強し今後の臨床医学の習得に活かすべく、78歳男性のご遺体について肉眼解剖を実施した。解剖は胸腹部を重点的に行い、次いで頭頸部、四肢、背部を調べた。内臓の形態について、図譜のエコー像やCT像と比較しながら立体的に理解できるよう解剖を進めた。運動器については、整形外科で特に問題とされる点に注意して形態を理解した。………この実習によって臨床医学の知識を形態的に補強することができ、有意義であった。（ここには要旨を書く）

キーワード：心エコー、肝胆膵画像解剖、胃癌術後、肺転移性腫瘍

イントロダクション

我々は医学科5年生として臨床実習に参加している。その中で形態学的に困難を感じたポイントがいくつかあり、特に胸腹部内臓の画像解剖について理解不足を感じた。それらを補強し、2年生の解剖実習では見過ごしていたポイントも学ぶべく、今回の夏期解剖実習に参加した。………（現状、動機、目標をまとめる）

材料と方法

ご献体

78歳男性、身長165cm、中肉。死亡診断書の直接死因は転移性肺癌と記載されている。また、胃癌切除の既往あり。

解剖の方法

解剖の手技は、P.W.タンク（編）、新井良八（訳）『グラント解剖学実習』1に従った。画像解剖の参考には、『画像解剖コンパクトナビ』2、『画像診断update』3を用いた。解剖器具は、解剖の授業で使われる標準の解剖セット、備え付けの解剖器具（Mallプローブ、ノミ、ハンマー、肋骨剪刀、双鋸）を用いた。内耳の剖出には電動彫刻刀も用いた。

………

結果と考察

胸部の解剖

7月22日〜23日：実習書に従って前胸壁を外した。軟部組織を取り除いて内臓が肋骨越しにみえるようにした。心臓を摘出して心胸郭比を求めると62%になり、心肥大と認められた。僧帽弁には肥厚があり弁膜症の存在も疑わせた。これらから生前に心不全があったものと考えられた。参考書と比べながら4 chamber viewなどの心エコーの代表的な断面の方向を実際の胸郭と心臓に当てはめ、それに沿って心臓の断面を作製した。これらを断面の方向とともにスケッチした（図1）。これによって心エコーの理解が補強された。

続いて、肺を摘出した。肺表面には10数個の5〜15mmの灰白色の腫瘤が認められた。肺門には腫大したリンパ節が認められ、1〜4cm径、弾性硬、黒色から灰白色の色調を呈していた。………（日誌の形式で、解剖内容と観察の結果や成果を記載する。情緒的な感想は一切不要）

………

参照文献

1. P.W.タンク (編), 新井良八 (監訳). グラント解剖学実習. 西村書店 (東京). pp. 256. 2009. ISBN-13: 978-4890133871.

………